

類されている。

第1期 数学 理学 化学

第2期 解剖学 生理学 病理学

第3期 薬剤学 内科学 外科学

第4期 眼科学 繙帯学 産科学

第5期 病床実験

「但し 病床実験は 府下外神田練堀町順天堂
においてす」の但し書きがついている。尚中
の文字はどこにも見当たらないが、彼が講義
ないし指導したことは間違いないと思われ
る。

比較的最近、島根県の牧野辰雄医師から、順天
堂大学医学部医史学研究室に次のような連絡が
あった。すなわち牧野氏はその祖父、牧野重朝の
卒業印書（卒業証書）4通を所持しているが、明
治6年12月から8年3月までの佐藤尚中署名入り
のものである。なるほど印鑑を見ても紛れもなく
尚中のものに違いない。

窮理、舎蜜が明治6年12月。解剖、生理が明治
7年5月。薬性、病理が明治7年9月。内科、外
科が明治8年3月と記されている。まさに練堀町
時代に相当する。

これらを基礎にして検討を加えたい。

35) 竹原地区の先覚者たち

—頼春風などについて—

Famous doctors in Takewara district,
mainly about some works of Dr. Shunpuu
Rai

広島県廿日市市 江川 義雄

江戸末期において広島地方の政治・文化の中心
は東に福山藩、西に安芸藩で、当地方は二分化さ
れ発展していった。

竹原はその中間に位置し、瀬戸内沿岸に面して
製塩業の先進地域として栄え、全国的には塩と米
の輸送中継地として有名であって、各地の文物・
文化が流入した。その産業や流通機構を背景にし
て、当時の武家社会とは異なった豊かな商人社会
による文教尊重の風潮が形成されていった。

当地区において代表される文化的人脈は頼山陽
を頂点におく頼家一族であって、それらの幅広い
交友には秀れた先覚者も多い。

頼山陽が余りにも高名な故に、この地方で有名
であっても、全国的に表面に現われない先人もあ
る。

本発表では、頼春風をはじめとして、その他こ
の地方の先人達について述べることにする。

頼春風（宝暦3年・1753—文政8年・1825）
名は惟彊または惟強、字は千齡または叔義であ
って、幼時には松三郎のちに千齡といった。

頼春水の弟である春風は明和6年、14歳の時、
父の亨翁の命で、春水について上阪し、古林見宜
塾で数年間、藤岡道筑について医を学んだ。

安政2年、父が老弱になるに及び帰郷し開業し
た。在阪中は医学のみならず、春水や尾藤二洲ら
と共に朱子学を学んだ。門弟としては三原藩の儒
者・石井豊洲や藤原春徳などがあり、人となりは
情篤く、兄弟仲よく、山陽の子・聿庵をよく輔け
た。

詩文・書にすぐれ、竹原に竹原書院を設立し
た。藩より7人扶持・御医師格を与えられたが、
終身隠居して仕えなかった。その屋敷は現在も春
風館として残っている。

著述としては「芳山小記」11巻、「適肥」8冊、
「春風館詩鈔」2巻、「春風所寄」32巻などがある。
頼山陽は何度も竹原を訪れ、春風に日本外史
著述についての相談や詩文の推敲をしあったとい
う。春風の長子は景讓と号し、兄・春水の嗣子と
なり、春風の娘・唯^{ただ}は養子・尚平を迎え、医業を
継承させた。

春風の弟であり、山陽の叔父にあたる碩儒、杏
坪は藩校教授・郡代官をつとめ、「芸藩通志」な
どを編纂した学者であったが、杏坪は竹原の文化
発展に尽した20人を選び、祭神として祀り、郷賢
祠を文政10年に建てた。それに医師として祀った
ものに寺本立軒（1650—1730）、塩谷道碩（1703—
1764）、それに頼春風の3名をあげている。立軒
は浅野藩医であったが、竹原に来て唐崎定信と共
に、この地に文教の礎を築いた。塩谷道碩は藩
儒・植田良斉につき、京で学び、頼一族の師であ

り、詩文に秀れ、その屋敷は竹原書院として、現在も文化活動の拠点として役割を演じている。その他、吉益東洞に師事した加川元厚、中西深斉に学んだ加藤柳軒や立軒の孫・斉藤愿仲は塩谷志師につき、のち京の浅井氏につき学んだ。

特記すべき事項としては、この地において蘭学との関係がみられることである。

橋本宗吉(1763—1836)と日高涼台(1797—1866)の兩人である。

宗吉(号・曇斎)は既に呉、中野、長門谷の諸氏により詳記されているところであり、涼台についての研究も諸家により数多く発表されて来たし、現在も末田氏による新資料の紹介があった。

この地からの適塾入門者としての穂波搜古、広瀬元恭塾に入門し、シーボルトに師事し熊本藩医であったといわれる穂波謙譲の名もあげられるが、現地では不詳であり、関係地域からの発表を待望せざるを得ない。

36) 月舟寿桂(幻雲)の医界における交友関係

Gesshu-Jukei's friends in medical society

北里東医研医史研・二之
沢病院・文教大学文学部

○小曾戸 洋
森田傳一郎
水沢 利忠

Hiroshi Kosoto, Denichiro Morita & Tcshitada
Mizusawa

月舟寿桂(1460—1533)、号は幻雲・中孚道人。きわめて高い学識を備えた室町時代の代表的禅僧である。医学史上では、日本初の印刷医書、大永8年阿佐井野版『医書大全』に刊語を記したことで知られるが、その医学に関する深遠な知識は、米沢本『史記』(国宝・歴史民族博物館所蔵)の扁鵲倉公列伝に遺された夥しい標記に顕著である。幻雲は入手可能な限りの数多くの医薬文献を駆使して標記作業を行っており(昨年の本学会で報告)当時の日本における漢籍医書の受容情况等

を解析する上で絶好の史料となっている。

幻雲は当時いかなる社会的立場にあってこれらの医書を目にし得たのか、また幻雲をしてかくまで医学に興味を抱かしたものは何か、幻雲の医学書受容の態度に正しい評価を与えるには、この背景をある程度明らかにしておく必要がある。このような観点のもとに今回幻雲の医界における交友活動の足跡を若干検討したので報告する。

幻雲は京都に生まれ(1460)、近江磯野の楞嚴寺にいた正中祥瑞に従学。正中に就いて京都で出家(1477)、正中入寂(1492)まで随侍した。京にあって天隠竜沢らと交わり、学才を知られた。一時丹波の願勝寺に乱を避け、のち越前の朝倉氏に招かれ、弘祥寺に住した(1509)。ついで京都の建仁寺に住し(1510—1525)、またその間、越前善応寺に赴き(1518)、さらに南禅寺の帖を受けた(1521)。晩年は建仁寺内に創建した一華院に隠居し、そこで没した(1533)。

竹田円俊(高定)・竹田定祐(月海・光照)

『幻雲文集』(以下『文集』という)に(竹田月海光照法印肖像)と「薬師寺円俊高定和尚寿像」の二文を収める。実は前者の幻雲自筆稿(享禄2年8月3日付)が研医会図書館に現存しており、さらに『文集』にない「竹田月海光照法印真讃并序」(享禄元年仲秋付・自筆)が付属している。これらは円俊(1455—1529)、定祐(1460—1528)の没する直前・直後に書かれた史料だけに、竹田氏の家系や当時の状況を窺う上で貴重である(新村拓『日本医療社会史の研究』において『文集』は活用されている)。幻雲の扁倉伝標記に、兩人の父照慶の著『延寿類要』が国書として唯一引用される背景にはこのような繋りがある。

坂上池院進月(宗精)

上池院進月(1452—1512)は坂九仏から数えて7代目。『文集』に「上池院進月宗精法印肖像并序」があり、これは新村氏の指摘のごとく進月に関する最も詳しく正確な史料である。『幻雲詩稿』(以下『詩稿』)にも関係を示す記事が見える。

陳外郎有年(祖田)・友蘭(周晦)

天朝滅亡に伴い日本に亡命した陳宗敬(順祖)を祖とする陳外郎家の4代。『文集』に「陳有年